

潮音寺だより

第 234 号

平成 15 年 4 月

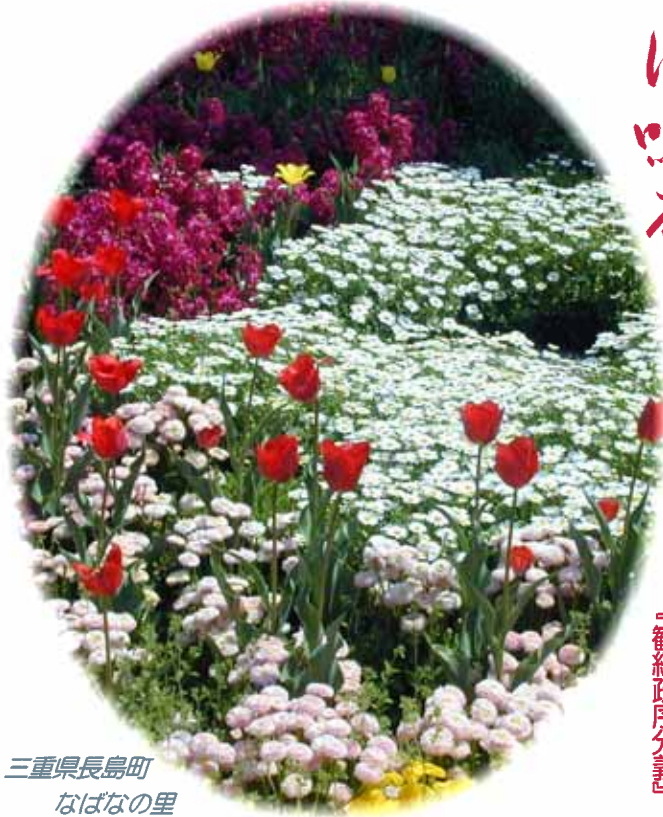
電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp

<ホームページ> <http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/>

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1 - 10-11



三重県長島町
なばなの里

に必ず洪鐘響くといえども、
鳴す扣くを待ちてませ、

【出典】善導大師
『観経疏序分義』

撞いて
みなされや

力を込めて
釣鐘を
撞いて
みなされや

ゴーンと
腹の底まで
響きこよう

唱えて
みなされや

声高らかに
念仏を
唱えて
みなされや

ジーンと
仏の慈悲が
心の底まで
響きこよう

撞けばこそ
唱えればこそ

争わない

「争い」という語句を、『類義語辞典』で調べてみますと、「いざこざ・こたごた・諍い・揉の事・唾み合い・角突き合い・内輪揉め・トラブル・喧嘩・悶着・軋轢・葛藤・紛争・紛糾・紛擾・鬭争・内紛・内争・訾争・内訌・係争・政争」とまあいろいろあるものです。

確かに、人間は、兄弟喧嘩や夫婦喧嘩に始まって、国対国の戦争にいたるまで、いろいろな場面や場所でも、争い合っています。人間が生き物である以上、衆生として宿命なのかもしれません。

争いというものは、必ず相手があります。争えば、双方に負担が掛かってきます。その原因を探り、早期に解決するのが望ましいといえます。それには、相手を非難す

るだけではだめで、多くの場合、自分にも非があるものであり、それを認めることが解決の第一歩であるといえます。

ところが、なかには、自分の側には思い当たる節が全くなく、言いがかりとしかいいようのないようなトラブルに巻き込まれることもあります。釈尊にも、こんなエピソードがあります。

.....

釈尊が舍衛国の祇園精舎に居られたときのことです。パセーナディ王が、釈尊や仏弟子たちに、供養を捧げたいと招待したので、大衆を引き連れて、王宮に向かわれました。そのとき、ボウシという尼僧が、道端で釈尊の袖にすがっていいました。

「仏様、あなたは私の夫です。こ

のとおりあなたの種を宿しており、ますのに、少しも顧みては下さらない。衣食も与えて下さらない。どうか妻の私を愛して下さい。」

見れば、この尼僧は、今日明日とも知れぬ大きなお腹をして、息苦しそうに喘ぎながら、釈尊にすり寄りました。

お供の大家の驚きは、一通りではありませんでした。この清浄高德の釈尊が、尼僧をはらますということがありましようか。尼僧は、また釈尊のお弟子でありながら、どつしてこのような辱めを与えようとするのだろうか、一同はただ顔を見合わせて嗤然としていました。

釈尊は、大衆の心中を察し、その疑惑の心を解いてやろうと、はるかに天の一方を仰ぎ見られまし

た。帝釈天は釈尊の意のあるところを知って、直ちに小さな一匹のネズミに化けて、その尼僧の側に走り寄りました。見れば、尼僧の裾から大きな木片が転げ出して、今まで大きく膨れていたお腹は、たちまち小さくなつてしまいました。ネズミが木片をかけた縄を噛み切ったからでした。

大衆は尼僧の奸計を知って、その罪を憎みました。国王も大いに怒つて斂命しました。

「仏弟子となりながら、大聖を誹謗しようとするけしからん尼僧だ。地を掘つて、この女を逆さま埋めにせよ。」

しかし釈尊は、これを押し止めて、王や大衆に告げられました。

「決して、酷くこのものを罰してはならない。これも仏の宿罪のい

たすとこそで、この者ひとりの罪ではない。」

といつて、次のような物語をされました。

「過去世に、ひとりの商人が、たくさん立派な真珠を持っていた。ひとりの女が、以前から持っているのと同じ大真珠を買おうとしたとき、ひとりの男が来て、その大真珠を倍の値を打ち出して買い取つてしまった。女はせっかくの望みの大真珠を得られなかったので、恨めしく思つて、その大真珠を譲り受けたいと申し込んだが、その男はそれを断つた。幾度も頼んだが、ついに承諾しなかつた。そこで、この女はこう誓つた。『これほゞまで頼んでも聞いてくれず、私を罵める。生々世々この恨みを忘れずに、あだをしよ

う。』

この恨みを抱いた女は、ボウシ尼僧であり、真珠を買つた男は、すなわち我が身である」と。

……………

さて、いかがでありましょうか。争いでは、どうしても、相手を責めたくありません。罵りたくありません。まして、自分に非がないとなれば、なおさらのごとであります。しかし、それでは、解決しないのです。では、どうすればよいのでしょうか。

釈尊のエピソードに、その答えがあるように思えます。前世の因縁にまで遡つて、懺悔するのです。怒りの火を消し止めてしまえば、争いはなくなります。争わない方法は、これしかないように思えるのです。

業 一う

「世界は業によって存在し、人々は業によって存在する。生存するものは業によって束縛されている。あたかも車が轆（わだかま）に結ばれて行くように」『スタバーム』
業の原語はサンスクリット語でカルマンといい、「行為」を意味します。人が善か悪かの行為をすれば、その行為はそのまま消え去ってしまつてはなく、何らかの余力が残り、それがその行為をした人のつぎのありかたを決定するのです。この力のことを業ということです。古代インドではこのような考え方から「業」による輪廻思想を生むことになりました。

人間はその行為によって、迷い

住職通信

不足が多いと
幸福が
逃げてゆく



見解・正しい考えなどの「八正道」であり、結局は「四つ（四諦）の真理（四諦説）の体得」が業の止滅（解脱）につながる

の世界に生まれ変わります。迷いの世界から抜け出すための、業の止滅への道が、具体的には正しい見解・正しい考えなどの「八正道」であり、結局は「四つ（四諦）の真理（四諦説）の体得」が業の止滅（解脱）につながるという釈尊の思想体系になるといえるでしょう。

裏がえして言えば、今の自分の行いによって、これから先の境遇が左右されるといえるでしょう。

（ひんさちや『仏教醫書百科』）

雑記

感謝 その一



新築庫裏への「寄付を、村瀬徳

雄様、江崎恒美様、島村啓一様より頂戴いたしました。

心より感謝申し上げます。

「一」挨拶

「本山で修行中であつた、超空正道（長男）が、四年間の大学を無事終了し、自坊である当山に戻ってまいりました。これより、法務に携わりますので、よろしくお願い申し上げます。

御忌回参

先月号でもご案内いたしましたように、左記の要領で、御忌回参の募集をいたしております。ご参加いただけますよう、こちらもお願ひ申し上げます。

◎期日 四月二十四日（木）

◎費用 七千円

「花」花だより

花見団子に桜餅 沐魚